



7. 中学校「選択学習」のカリキュラム評価

——滋賀大学附属中学校・選択B社会科を事例として——

田中博之

筆者が滋賀大学附属中学校と研究上のおつきあいを始めてもう5年近くになる。その間、特に当校の「びわこ学習」のカリキュラム開発や評価に関する研究のお手伝いをさせていただいた。(田中 1987)そして本年度からは、新しく始められた「選択学習」のカリキュラム評価と改善のプロジェクトに参加する機会を得た。研究開発学校での実験的な取り組みにたいして研究者として新しいアイデアを提供したり、また具体的なデータに基づいて実践の評価を行なうことで当校の実践の基盤を固めることができると願っている。

1. 研究計画と本章の構成

本年行なった研究は大きく三つの柱で構成されている。まず一つめは、選択学習を受けている生徒に質問紙調査を実施して、選択学習にかかわる心理的特性と実際の学習状況とを把握しようとしたことである。二つめは、選択学習の指導場面をビデオに収録し、そこでの指導法の特徴を抽出することである。特に選択学習で重要になるとされる個人差に対応する指導のあり方を実際の熟練教師の指導場面の分析から明らかにしたい。そして三つめに、カリキュラム評価からカリキュラム改善を行なう試みを一つ紹介する。平成元年度から滋賀大学附属中学校も研究開発学校として2年目を迎え、新たなカリキュラムの改善が求められている。そこで新しい実践の方向性として、「系選択」という考え方を導入しその枠組みと意義について検討してみたい。

本章では以上の三つの研究を順に紹介していく。

2. 心理特性および学習状況調査

[調査の概要]

選択学習に関する質問紙調査は2種類のもので作成された。一つめは、選択学習に関係すると思われる心理的特性を測るものである(調査1. 資料1)そしてもう一つは、実際の学習場面での活動の様子を具体的に把握するものである。(調査2. 資料2)

項目作成にあたっては、いくつかの関連する因子を想定した。調査1(心理的特性)では、①選択力(様々な選択場面で、満足のいく適切な選択ができる能力)、②自己評価力(自己について振り返り、自己の特性を評価できる能力)、③独立達成傾向(できるだけ自分の力で物事をやりとげようとする傾向)、④チャレンジ性(今までやったことがない新しいことでも、頑張ってみようとする傾向)、という4つの因子を想定した。また、調査2(学習状況)では、①選択行動(学習場面での自分に合った満足のいく選択行動)②自己評価(自己の学習に対する適切な評価活動)、③メディア活用(学習にとって効果的なメディアの活用)、④学習

意欲（自分の力で積極的に最後まで学習をやりとげようとする傾向）、⑤自己認識（現在の自分の学習状況や自己の成長、そして友達との違いについての認識）、という5つの因子を想定した。

分析の手順としては、両調査ともに、4項目の反応形式をはい・いいえの2件法に変換してから、次の3つの作業を実施した。まずカイ2乗検定により、学年間での独立性の検定を行なった。次に同じ手法で、男女間の検定を行なった。（本来の分析の趣旨からは、学年間と男女間の得点の差の検定は、因子分析の結果から抽出した因子をもとに因子毎の得点を算出して、それをT検定に入力して行なうべきであるが、ここではその結果は割愛する）そして3番目に、因子分析によりいくつかの因子を抽出し、因子負荷量を基準にして項目を精選した。

それでは、各調査の結果を順に紹介したい。ただしここでは、3つめの因子分析の結果と各調査の反応結果の詳細については割愛する。

[調査1の結果]

まず調査1の結果の全体的特徴を見てみよう。項目について、特にはいと答えた生徒が多いものを拾いだしてみると、新しいことや今までしたことのないことに挑戦してみたいと考える生徒が多い。（項目7・81%，項目14・90%，項目18・79%，項目23・77%。ただし項目14は逆スケール。%は小数点以下四捨五入，以下同様）また、人に頼らずに自分の力で何かをやり始めたり、成し遂げようという傾向が強い。（項目11・84%，項目24・82%，項目28・74%，項目36・87%。ただし項目28は逆スケール）さらに、自分の過去や将来についてよく考えてみる傾向を持つ生徒が多く見られる。（項目13・75%，項目26・82%，項目42・82%）他の項目についてみても、否定的な反応をした生徒が70%を越えるような項目はないことから、滋賀大学附属中学校の生徒は自己採点のレベルでは、かなり強い積極的な心理特性を持っているといえるだろう。

次に学年間の有意差を見てみよう。項目の12, 22, 25についての反応をまとめてみると、学年が進むにつれて選択をするときに迷ったり、選択をした後で後悔するということが少なくなる。つまり日常の生活場面では学年が上がるほど、選択力（決断力）がついていると自己判断しているようだ。もう一つ、項目の6, 40, 44を見てみると、宿題や課題を自分できちんとやりとげようという意欲や、決められたこと以外に自主的にやろうとする積極性に関して特に2年生が低くなっていることが分かる。この主体性という点については、「学年という発達の程度差にはあまり関係せず、むしろある学年が一貫して持つ特徴である。」という指摘を南出教諭より受けた。

男女間では、項目の20, 37, 41のように、選択する際にはなかなか決定できないが、自分が納得できるまで時間をかける傾向が女子に強く出ている。ただし、項目の質問内容が女子の生活習慣に添ったものだったためにこのような偏りが見られたのかも知れない。また、女子の方が、自分自身の性格や理想について考えてみることが多い。（項目21, 33, 42）つまり、女子の方がより内省的であり、自分なりの自己評価の習慣を持つ子が多いといえるだろう。

調査1の因子分析の結果は、2番目の研究で抽出児を選ぶ基準として使用したため、次節で検討することにした。

[調査2の結果]

まず全体的な特徴から。調査1と同じように、調査2でもほとんどの項目で肯定的な反応が50%を超えている。言いかえるなら、この調査2はより具体的な選択学習の場面についての学習状況を想定しているために、このような結果が出たことは、多くの生徒が選択学習に積極的に取り組み、満足感を得ていることを示している。そのような中でも次のような3つの特徴が浮かびあがってきた。

一つめに、自分にとってやりがいがありそうだなどの理由をはっきりさせて、自分自身の意志で選択をしている生徒が多い。(項目1・91%、項目30・92%、項目43・94%、ただし項目1と43は逆スケール) また、ほとんどの生徒が自分の選択は適切だったと感じ、選択学習の時間は充実していて満足したと答えている。(項目16・88%、項目21・94%、項目23・85%、項目27・83%、ただし項目16は逆スケール) さらに、学習の途中で分からないことや困ったことがあっても、グループで助け合ったり、自分の力であきらめずに最後まで頑張る傾向が強い。(項目13・93%、項目15・85%、項目38・89%、項目45・94%、ただし項目13は逆スケール) あくまで推測の域を出ないが、選択学習に対するこのような主体的、協力的な態度は、今年度始められたこの選択学習だけで養われたものではないだろう。もう5年ほど継続されているもう一つのカリキュラム「びわこ学習」において、課題設定を自主的に行なったり、自分の力で資料を収集したり、班での協力を一年間継続したりといった経験が学習形態を同じくするこの選択学習にも生きていけると言えるだろう。

調査2についての学年間の有意差は、次の2点においてみられた。(ただし教科問題選択は2・3年生のみ実施されているので、学年間の比較は、2・3年生のみで行なった) まず、項目28, 35, 44に見られるように、2年生よりも3年生の方が、毎時間の学習後にきちんとまとめをして、その時間にできたことや次の時間にすることを考えている。つまり自己評価の力がついてきているといえるのではないだろうか。また項目31, 34, 41での反応に共通してみられることは、3年生の方が、選択学習をしながら、自分の長所や興味関心について考えたり、あるいは友達との違いにも目をむける傾向が強くなっている。2年生と比較して、3年生の方が自己認識力がついてきているといえるだろう。

男女間では、まず、女子の方が学習への取り組みがきちんとしている。例えば、他の班の発表のし方に注意を向けたり、資料を活用したり、友達と協力するといった学習態度がしっかりしている。(項目8, 33, 36, 38) もう一つ、女子の方が選択学習の時間に満足していることが分かった。(項目23, 27)

ただし、調査1・2ともに学年と男女の間の実際の差はあまり大きなものではない。

今後の分析の視点としては、調査1と調査2の因子間の関連性を、相関係数を算出することで検討してみる必要があるだろう。さらに、次節で紹介するような個人差に応じる指導法とこの調査結果を関連させて、生徒の実態に合わせたきめ細かい指導のあり方を求めていきたい。

3. 個人差に応じる指導法の分析

[研究の概要]

ひと口に選択学習といっても、そこでの選択の基準や学習内容の構成の視点などによって、

様々なタイプが存在する。(木原 1987) しかしどのタイプの選択学習であれ、ある学習集団内での多様な個の特性に応じる指導を行なうことが選択学習における教師の役割の中でも最も重要なものであろう。

この節で対象にする選択学習 B 社会科(3年生・南出教諭担当)では、特に主体的な学習活動と社会科での能力目標の育成を重視している。さらに、この教科を選択してくる生徒の特性を見てみると、教科の到達度や得意意識などの点において多様な生徒がいることが分かる。そこで本研究においては、個人差の次元を、学習者の「教科の得意意識」と「独立達成傾向」の2つに限定し、それぞれの次元で集団を上位群と下位群の2群に分割して、合計4つの学習者タイプを構成した。

研究の流れとしては、まず始めに、授業の観察や授業ビデオの分析、さらに授業後の教師インタビューの内容分析などの結果から、選択学習全体にわたる特徴的な指導法を抽出・整理する。次に2種類の質問紙調査によって4つの個人差のタイプにあてはまる生徒を4名抽出する。そして授業観察やインタビューによってデータを収集し、全体の指導法の枠組みの中に位置づけながら、その4名に対する教師の個人指導の特徴を明らかにする。

[選択学習における指導法の抽出]

南出教諭の指導場面をVTR録画したのは、6月24日第6校時(選択・導入段階)と11月25日第4校時(実施段階)の2回である。さらにまとめと評価段階については、南出教諭へのインタビューによって補うことにより、学習の時系列に合わせた3段階の指導法を整理した。

各段階の指導法のリストは、いくつかの下位カテゴリーによって細かく分類した。まず大きく、「学習の拡散」と「学習の収束」という二つの概念を用いた。この二つの概念と3つの学習の段階とを組み合わせることができる6個のセルをさらにいくつかのカテゴリーによって分けてみた。そうしてできた20個のセルの中にビデオ分析やインタビューによって抽出した指導法を位置づけていったのである。(表1) この表から何らかの一般的な知見を見いだすことはできないが、生徒達の主体的な課題選択学習における指導法の全体像が浮かびあがってきたといえるだろう。今後も他教科での指導場面の分析などに研究を進めて、この指導リスト表をより完成されたものに仕上げていきたいと思っている。

[個人差に応じる指導法の分析]

抽出児を決定するために、2種類の調査を実施した。一つは、社会科に対する得意意識を測るものである。測定論的には脆弱なものであるが、国語科・数学科・社会科・理科・英語科の中で、対象とする社会科が何番目に得意であるかを問う設問を用意した。そこで1・2番目という反応は社会科が「得意」であり、4・5番目という反応は「不得意」と見なした。もう一つの尺度は、前節で紹介した心理特性を測るための調査1の質問紙を用いた。全45項目に関して主因子法で因子を抽出してからバリマックス回転をかけた。次に、そうして得られた第一因子の項目の中から、因子負荷量が0.35(絶対値)以上のものを取り、「独立達成傾向」を測る尺度とした。(項目番号2・6・10・13・17・20・21・27・30・34・36) 4件法の反応形式を2件法に変更してから、「はい」という反応には1点、「いいえ」には0点を与え、合計11点満点で得点を算出した。(逆スケールでは「はい」に0点、「いいえ」に1点とした) そうして、全生徒40名の得点分布を求め、上位20%と下位20%をそれぞれ独立達成傾向において、

表1 選択学習における指導法

		選択・導入段階	活動・実施段階		まとめ・評価段階	
学 習 の 拡 散	問題意識の拡大	<ul style="list-style-type: none"> 教科の授業ではできない内容も学習できることを認識させる。 課題について友人と相談させる。 不十分なテーマはふくらませるよう指示する。 	発想の拡大	<ul style="list-style-type: none"> 発想を変えて別の視点からも見るよう指示する。 だんだんよいものができてきたと言って励ます。 	自主性の明確化	<ul style="list-style-type: none"> 選択動機についてのアンケートを実施する。
	学習のイメージ化	<ul style="list-style-type: none"> 課題の具体例を示す。 学習の成果としてでき上がるものを見せる。 利用できるメディア（機器・資料）についての情報を与える。 	学習のイメージ化	<ul style="list-style-type: none"> 表現の仕方の具体例を挙げる。 学習方法の具体例を示す。 	次時の学習の意識化	<ul style="list-style-type: none"> 学習記録をつけさせる。 自己評価カードに記入させる。
	学習の自由性の要求	<ul style="list-style-type: none"> 相談にはのるが、自分で考えるよう指示する。 基本的な資料は教師が準備するが、詳しい資料は各自で集めさせる。 教師の手助けが不要ならば、自由研究も認める。 	学習の自由性の要求	<ul style="list-style-type: none"> 資料の見方については説明するが、そこから言えることは自分で考えさせる。 生徒の質問に対しての答えではなくヒントを与える。 自分の力で発展していける生徒には自由に進めさせる。 	自由度の高いまとめ	<ul style="list-style-type: none"> 特に一斉でまとめはせず、自由に学習を終了させる。 1年間の最終段階には、各分科会ごとに発表会をさせる。
学 習 の 収 束	未達成者の補助	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の考えた構想をチェックする。 すぐにできない生徒には別の簡単な課題から理り組ませる。 学習内容や方法が十分に把握できていない生徒には個別に説明する。 	把学習状況の把握	<ul style="list-style-type: none"> 進行状況を確認する。 構想がねれたかどうか確認する。 	学習成果の評価	<ul style="list-style-type: none"> 学習ででき上がったものを提出させる。 発表会の成果を評価する。
			問題解決の補助	<ul style="list-style-type: none"> 前時の生徒の質問に答えるための参考資料を準備する。 学習のプロセスに対応した指導をする。 すぐに答えられない質問は保留しておき、次時に答える。 		
	課題の関連づけ	<ul style="list-style-type: none"> 課題を既習知識に関連づける。 課題を他教科の領域と関連づける。 他教科の教師にも質問に行かせる。 	関連学習内容のづけ	<ul style="list-style-type: none"> 教科学習の社会科で学習したことと関連づける。 前時の学習内容をふりかえらせる。 	生徒の実態把握	<ul style="list-style-type: none"> 社会科についての意識調査をする。 毎時間、生徒の活動・態度を観察する。 学習記録により、生徒のつまづき、問題点を把握したり、次の指示の参考にする。
			共学習内容の共有化	<ul style="list-style-type: none"> 同じグループの他の生徒にも一緒に聞いておくよう指示する。 		
学習の方向性の明示	<ul style="list-style-type: none"> 評価の視点について説明する。 学習の約束ごとについて説明する。 学習場所・準備物について確認する。 	統学習進度の一	<ul style="list-style-type: none"> 次時までにはやりおえておくことを確認する。 調べたことを紙やTPシートにまとめさせる。 	自己評価のチェック	<ul style="list-style-type: none"> 自己評価カードをチェックする。 	

「高い」生徒および「低い」生徒であると定義した。(実際には、11点および10点の得点を持つものが、7名・17.9%、4点以下の得点を持つものが6名15.5%であった)

以上のように、教科の得意意識の高低と独立達成傾向(主体性)の高低によって求められる4つのタイプにあてはまる生徒を4名抽出した。それらの生徒は、O子((得意・主体的)、M子(得意・非主体的)、T男(苦手・主体的)、U子(苦手・非主体的)である。

授業観察と授業VTRの分析により各抽出児への教師の個別指導を整理した。対象にした授業の時間数に限界があるために十分に大きな指導回数を保証することができず、明確な判断を下すことはできないが、異なる個人差を持つ4名の生徒それぞれに対して教師は違った指導を行なっていることが分かった。

まず、社会科が得意で主体性も高いO子に対しては、ほとんど具体的な指示はせず、学習のプロセスについて高次の論理的思考を要求している。逆に両得点ともに低いU子には、発想を広げさせたり方法の具体例を示したりして、自分なりの課題解決を促すような指導をしている。このように正反対の特性を持つ二人の生徒に対して、指導のレベルには差をつけながらも、「学習の拡散」のための手だてを多くとっていることが分かる。

一方、社会科は得意であるが主体性は低いM子と、逆に社会科は苦手であるが主体性の高いT男に対しては、前の二人の生徒と比較して、「学習の収束」のための指導を多くしていることが分かる。このようにある程度学習を進めるだけの力があると考えられる生徒には一つ一つの学習成果を確実に定着させていくことで学習を促進させようとしている。例えば、「次にやるべきこと」についての指導では、O子に対してそれを自分で考えさせているが、T男に対しては具体的内容を教師の方から指示している。

また、動機づけのための指導に関しては、主体性と得意意識がともに高いO子についてはめだた指導は行なわれなかったが、他の3名の生徒には、励ましや称賛の声をかけてやることで学習を促進している。

以上のように個の特性に応じて指導法を違える場合が多いが、どの生徒に対しても進行状況を確認して学習の実態を把握し次にやるべきことを念頭において指導をしている。この点は、対象とした授業が、生徒の主体的な学習による課題別学習であったため、学習の確認とアドバイスを与えてやることが重要になるからであると考えられる。

今回の分析では、個人差を教科の得意意識と独立達成傾向という二つに限定したが、選択学習において重要になる個人差はこの他にも、教科の好意度、メディア操作の得意度、コース内容についての既有知識の量、性差、など多くの変数が想定されるだろう。このような点について今後も研究を継続していきたい。

4. 系選択を取り入れたカリキュラム改善の試み

滋賀大学附属中学校では、研究開発の2年度目に当たる平成元年度から、選択履修の対象を修正する計画案を検討した。当校の教科間選択学習では、これまでの先進校(木原 1988)と同様に、各教科を選択の対象としていた。しかし本年度からは、9教科を3群に分けて選択させる方式に切りかえた。

このように滋賀大学附属中学校では、カリキュラムの修正を行なっている。そこで三つめの

研究として、カリキュラム評価から改善に至るプロセスを追い、新しい「系選択」の考え方とその可能性を検討したい。

〔滋賀大学附属中学校のカリキュラム修正案〕

研究開発学校初年度の昭和63年度研究計画では、前章の南出教諭による学校カリキュラムの紹介に見られるように、選択学習は教科内と教科間の二つのものが用意されていた。そのうち教科間選択学習は、選択A（音・美・保体・技家）と選択B（国・社・数・理・英）からなっている。このうち3年生は両方を週1時間ずつ選択し、2年生は選択Bのみである。

平成元年度からは、以上のようなカリキュラムに修正を加えた。選択の基準を興味・関心おくことはそのままにしながらも、選択可能な教科の数を増やして選択の自由度を高めるために、9教科を3つの教科群に分けて2・3年生に選択させるというものである。さらに詳しく見てみると、3つの教科群は、それぞれ、①系例・用具系教科（国語・数学・英語）、②系列・内容系教科（社会・理科）、③系列・表現系教科（音楽・美術・保健体育・技術家庭）というように命名されている。このうち①と②を合わせて選択Ⅰ、そして③を選択Ⅱとしている。さらに③系列は通年であるが、①系列と②系列は前・後期制をしき、より幅広い選択計画が可能になるようにしている。

〔系選択学習の考え方と今後の可能性〕

以上のような、系選択学習という考え方は、中学校における選択履修の方法としては、滋賀大学附属中学校の独自のアイデアである。ここでは特に選択対象を教科にしないところに大きな意味があると思われる。まず一点は、当校の研究計画にも述べられているように、どの学年でも9つの教科からの選択が可能になるため、生徒が持つ多様性により広く対応できるという利点である。そしてもう一つの意味は、生徒の実際の興味・関心の持ち方に関係している。つまり、生徒は実際には、各教科単位で興味を抱くということはあまり多くなく、例えば社会科の中でも歴史は好きだが公民的分野は好きではない、というように教科よりさらに細かい単位で考えていることが分かってきた。言い換えれば、生徒は教科という単位ではなく、科目や学習コースの内容という桁で選択を行なっているのである。そうすると選択の対象を教科にする意味がなくなってしまうのである。

しかし一方で、年度の変わりめを境として数回の研究会を持つうちに、筆者なりに、いくつかの改善点について検討してみてもはどうだろうかと思うようになってきた。一つは、滋賀大学附属中学校の選択学習カリキュラムの特色をより特徴づけて生かしていく方向での意見である。その特徴とは、選択学習の目的を、内容目標よりも生徒の能力に関する目標の達成に置くという考え方である。もう一つは、滋賀プランにあげられた3つの系（用具系、内容系、表現系）による分類法は、教科に関する従来の教育学の用語を生かそうとしているのだけれども、かえってそのことによって選択学習の新しい教育的意味を生かしきれていないのではないか、という考え方である。この点についてさらに詳しくいえば、次のようになる。選択学習がめざす能力目標の達成という観点からすれば、用具・内容・表現という3つの要素は程度の差こそあれ、各教科がすべて含み持つものであるから、一つの要素だけを一つの教科に割り当てるよりも、各教科毎に味付けをかえて3つの要素ともに各教科で育成していくほうがよいのではないかと考えるのである。

例えば、用具的な能力目標を、「情報・伝達」技術の育成というようにとらえたとき、いわゆる用具系の教科である。国語科や数学科、英語科が主流になるのは間違いない。国語科ではレポートの書き方、数学科ではデータとグラフ表現、英語科では英語によるコミュニケーション、などがまっ先にあげられるだろう。しかし、今日のような情報化社会の中では、できるだけ多様な機会に応じられる多面的なコミュニケーション能力を育成することが求められているといえるだろう。そうなれば他の教科でも、この「情報・伝達」に関して主要3教科とは異なる多様な技能の育成を工夫することができるのではないだろうか。

具体的には、社会科で統計資料のコンピュータ処理を実際の地域のデータをもとに行なったり、家庭科でライフサイエンスに関する実験結果について多様なメディアを駆使して発表する学習を設定したり、といったものが想定される。同様に理科についても自分の研究結果を効果的に発表する能力を育成するカリキュラムを考えることができよう。

もう一つ、「表現」という活動をいわゆる芸術教科のみに限定してみる考え方にもやや問題があるように思われる。もちろん人間の表現活動は、音楽科や美術科に代表されるような芸術的活動において主に行なわれることは当然である。しかし、表現を人間の創造的活動全般をさす広い意味でとらえるならば、全教科での応用例が考えられてよいだろう。例えば、国語科や英語科の創作劇作りの活動や、数学科での問題作り、理科での科学おもちゃ作り、などがあげられるだろう。具体的な物の製作を通して、各教科の特色に応じた創造性の育成をねらうことができるだろう。

以上のような考え方に立って、系選択学習を取り入れた学校カリキュラムの新しいプランを提案してみたい。そのプランの概略について整理したものが表2である。

この表にある「能力系」を取り入れた系選択学習のあり方について、もう少し詳しく紹介しておきたい。

まず能力系選択学習の目的は、普段の教科学習では育成しにくい能力目標の達成を集中的に行なうことである。従来の教科学習では、ややもすると知識の獲得を中心とした内容目標の達成に重点をおきがちになる。そこで選択学習では、育成したい能力目標を全面に押し出した「能力系」を設定し、子供の個人差に応じて選択させることによって、多面的な能力の獲得を可能にしようとするものである。

次にカリキュラムの構成としては、「情報・伝達系」「論理・探求系」「造形・創作系」「価値・審美系」の4つの能力系をおく。そして各系には、複数の教科が入り、その能力の育成にとってふさわしい学習コースを提供する。このことを逆にいえば、各教科は、できるかぎり4つの系すべてに教科特性を生かした学習コースを提供することが望ましい。

生徒はこのようなカリキュラム構成のもとで、1年間で2つの系に所属して2つの側面からの能力形成を行なったり、あるいは1つの教科に限定して異なる能力系で提供されているその教科の学習コースを選択することによって、学習技能の細かなバリエーションを生かした能力形成を行なうこともできる。こうしたカリキュラム運営上の工夫により、3年間で4つの能力系をすべて選択して、能力の全面的な育成を図ることを最終的な目標とする。

学習の全体的な内容や方法についての決定はコース設計を行なう教師にかなりの部分が任されているが、細かな点については生徒自らの意思決定が求められていることが学習活動の特徴

表2 選択学習における「能力系」の枠組み

能力系	目的	単元の具体例	適するメディア
1. 情報・伝達系	自らの目的に応じて情報を選択したり、収集した情報と自分自身の考えをまとめて他者に伝達する能力を育成する。統計的なデータ処理の基礎も含む。	<ul style="list-style-type: none"> ・レポートの書き方 (国語科) ・辞書の使い方と文献検索 (国語科) ・統計資料と主題図の作成 (社会科) ・グラフとデータ (数学科) ・英語でインタビュー (英語科) 	OHP スライド コンピュータ ビデオカメラ テープレコーダ
2. 論理・探究系	論理的なものの見方・考え方や論証のし方、さらに科学的思考力を育成する。またそれに基づいた実証的な調査・実験技能の習得をめざす。	<ul style="list-style-type: none"> ・説明文の読解 (国語科) ・実験計画法 (理科) ・命題と論証 (数学科) ・裁判と憲法 (社会科) ・課題研究 (社会科) 	各種実験器具 コンピュータ
3. 造形・創作系	自らのイメージを形にして表現する能力を育成する。表現形式としては、図・絵画・文章・模型・コンピュータグラフィックスなど多様な側面をあつかう。	<ul style="list-style-type: none"> ・物語と創作劇 (国語科・英語科) ・数学の問題作り (数学科) ・科学おもちゃ作り (理科) ・作曲 (音楽科) ・作品作り (美術科) 	コンピュータ OHP カメラ ビデオカメラ
4. 価値・審美系	先人たちが生きる目的や行き方の問題をどのように考えて来たかを考えることによって、自己の成長と将来の行き方について判断する力を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> ・伝記の鑑賞 (国語科) ・数学史と数学者の研究 (数学科) ・科学史と数学者の研究 (理科) ・環境破壊を防ぐ人々 (社会科) ・芸術家の人生 (美術科、音楽科) 	テレビ 各種伝記

である。言いかえるならば、作業中心の課題解決的学習であるといえるだろう。

以上の点に加えて、ガイダンスと自己評価活動を重視することをあげておきたい。選択時でのオリエンテーションや学習過程での自己評価を行なわせることで、自己の能力に関する自己概念を明確化し、それに基づく計画的な選択を行なう力をつけたいのである。

このような「能力系」の考え方を取り入れた選択学習の試みはまだ始まったばかりである。というより、実践に移すにはまだ多くの問題をかかえていると言ったほうが正確であろう。滋賀大学附属中学校での研究会でも、いくつかの課題が提出された。一つは、すべての教科で、この4つの能力系にあてはまる単元を提供できるとは限らないという点である。また、教科選択という枠組みは中学校教育の場ではくずしく、逆に各教科でこの4つの能力系にこだわらずにいくつかの能力コースを設定したほうがよいのではないかという意見も出された。もう一つは、それぞれの教科が4つの能力系に合わせた学習単元を作成することになれば、4つの系を見通した系統的なカリキュラムプランを開発することがもっとも重要になってくるという指摘がなされた。

いずれにせよ、滋賀大学附属中学校では、各分野からのサポートを得ながら、着実にカリキュラムの改訂を進めている。特にこれまでの選択学習の研究では扱われていなかった、選択能力の育成、選択を通じた自己認識力の育成、そして多面的な学習能力の形成という課題に答えようとしている。同校での3年間の研究開発の進展を期待したい。

選択学習に関する先行研究に多くを学ぶ機会を与えてくれた大阪大学大学院の木原俊行君に

感謝したい。特に選択学習の指導法「学習の収束」と「学習の拡散」という対概念で整理するアイデアは彼のものである。また実際のデータの収集と分析には学部4回生の玉置千歳さんにお世話になった。最後になりましたが、授業分析に快く協力していただいた滋賀大学附属中学校の南出先生に記して感謝いたします。

〈参考文献〉

木原俊行 (1987) 「中学校選択学習類型化の試み」水越敏行他編著『授業研究情報5』明治図書
 田中博之 (1987) 「中学校における総合学習の実践動向」水越敏行代表『初等中等教育における「新しい教育方法」の動向と課題』教育方法調査研究会
 木原俊行 (1988) 「中学校の個別化教育」水越敏行代表『初等中等教育における「新しい指導システム」の動向と課題』学習システム研究会
 田中博之 (1988) 「中学校の課題研究」水越敏行編著『子供の情報能力を育てる』ぎょうせい

調査 I

この調査は、日常生活でのあなたの行動や気持ちを調べるためのものです。調査の結果は、学校での成績には関係ありませんし、答えによい悪いはありませんから、思ったとおり答えてください。

〈答え方〉 質問を読んで、書かれていることが、自分によくあてはまると思えば1「はい」に、どちらかといえはあてはまると思えば2に、どちらかといえはあてはまらないと思えば3に、あてはまらないと思えば4「いいえ」に一つ○をつけてください。

「どちらでもない」と思う人も少しでも近い方に必ず○をつけてください。

年 _____ 組 _____ 番号 _____ 名前 _____ (男・女)

	は	い
	い	え
1. レストランなどで、何を食べるかを、すぐに決めることができる。	1	2-3-4
2. 「これは自分の長所だ」と気づいたことがある。	1	2-3-4
3. 自分ががんばってしていることに、口をはさまれるのはいやだと思う。	1	2-3-4
4. 一度それに決めると、いつも同じものを選ぶ方だ。	1	2-3-4
5. まわりのみんなは決まっているのに、自分一人だけ決まらずに、あせることがある。	1	2-3-4
6. わからないことがあると、自分で調べるよりも、人に聞くことが多い。	1	2-3-4
7. いつも同じことをするよりも、違うことがしてみたいと思う。	1	2-3-4
8. 自由な時間があれば、何をしたいかを、すぐに決められる方だ。	1	2-3-4
9. 友達と遊ぶ時、みんな決めたことに、ついていく方だ。	1	2-3-4
10. 中学生になって、自分が成長したかどうか、考えてみることもある。	1	2-3-4
11. 自分一人で何かをなしとげるのは、おもしろいと思う。	1	2-3-4
12. 「あっちにしておけばよかった」と思うことがよくある。	1	2-3-4
13. やった後で、うまくできているかどうか、ふりかえってみる方だ。	1	2-3-4
14. パソコンやワープロを、使ってみるのはこわそうだ(こわかった)。	1	2-3-4
15. 買い物に行って、自分では決められないことがよくある。	1	2-3-4
16. 自分の特技をきかれたら、すぐに答えられる。	1	2-3-4
17. 自分でたてた目標は、きちんと守ることができる。	1	2-3-4
18. よく「不思議だなあ」とか「なぜだろう」と考えることがある。	1	2-3-4
19. 好きな教科、きらいな教科が、すぐにあげられる。	1	2-3-4
20. 時間はかかっても、気に入るまでじっくり探す方だ。	1	2-3-4

年 _____ 組 _____ 番号 _____ 名前 _____ (男・女)

- | | は | い | い | え |
|---|---|---|---|---|
| 21. 昔の自分と今の自分を、比べてみることもある。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 22. 「他人の意見に、従っておけばよかった」と思うことが多い。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 23. 新しいものがあると、興味をおぼえて、それを選ぶ方だ。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 24. 読もうと決めた本は、最後まで読むことが多い。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 25. 見たいテレビ番組が2つある時、どちらを見るか、いつも迷う。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 26. テストの結果を見て、必ず反省してみる。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 27. 知らないことがあったら、調べてみたくなる。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 28. 先生「それでいい」と言ってもらわないと、学習が進まない。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 29. 将来の夢について、時々、考えてみることもある。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 30. 難しい宿題でも、とにかく一人でやってみる方だ。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 31. 新しいことをするよりも、ふだんの通りにしてみる方が、安心する。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 32. どちらにするか、考えるのがめんどうになると、なげやりになることがよくある。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 33. 「自分の短所は、何だろう」と考えてみることもある。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 34. 難しい問題でも、がんばってといてみようとする人が多い。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 35. お金があったら、宝くじを買うよりも、貯金した方がいいと思う。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 36. 自分で決めたことだと、やる気がわいてくる。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 37. 洋服を買う時、いつも迷って時間がかかる。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 38. 思い切って、ヘアスタイルを変えたりしない方だ。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 39. 物事をする前に、自分にできるかどうか、考えてみる方だ。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 40. 宿題を自分でせずに、友達を見せてもらうことがよくある。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 41. 買い物に行くと、自分の気に入ったものがあるまで、探す方だ。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 42. 「こういう人間になりたい」と思えがくことがよくある。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 43. 何かをする時に、よくやりかたを変える方だ。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 44. 決められたことでなければ、自分からはやらないことが多い。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 45. 自分が選んだものには、いつも満足する。 | 1 | 2 | 3 | 4 |

調査Ⅱ

この調査は、選択学習Bの時間のあなたの行動や気持ちを調べるものです。調査の結果は、学校での成績には関係ありませんし、答えによい悪いはありませんから、思ったとおり答えてください。

〈答え方〉 質問を読んで、書かれていることが、自分によくあてはまると思えば1「はい」に、どちらかといえはあてはまると思えば2に、どちらといえはあてはまらないと思えば3に、あてはまらないと思えば4「いいえ」に一つ○をつけてください。

「どちらでもない」と思う人も少しでも近い方に必ず○をつけてください。

年 _____ 組 _____ 番号 _____ 名前 _____ (男・女)

- | | は | い | い | え |
|------------------------------------|---|---|---|---|
| 1. 友達が選んだので、私もそれと同じものに決めた。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 2. その時間の学習で、十分できなかったことを反省した。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 3. 学校の図書館や、資料室においてあるものを活用した。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 4. 授業時間以外、あまり積極的に調べたり、話しあったりしなかった。 | 1 | 2 | 3 | 4 |

- | | |
|--|---------|
| 5. 自分のよいところをのばすために、これからどんな学習をしていけばよいか、自覚できた。 | 1-2-3-4 |
| 6. はっきりとテストの点数の出てこない学習は、あまりやる気がわいてこなかった。 | 1-2-3-4 |
| 7. ふだんの教科の学習で使っているものだけでは、十分な情報が得られなかった。 | 1-2-3-4 |
| 8. 調べたことを、友達に対してわかりやすく発表するように、気をつけた。 | 1-2-3-4 |
| 9. ふじゅぶんな点を反省して、次の時間からの計画を修正した。 | 1-2-3-4 |
| 10. 選択するさいに、将来の自分の進路との関係も考えた。 | 1-2-3-4 |
| 11. 自分の取り組んでいる学習を、先生に見せて、評価してもらった。 | 1-2-3-4 |
| 12. 先生の用意してくれた資料を、利用して調べた。 | 1-2-3-4 |
| 13. 調べる方法や手段がわからないと、すぐあきらめてしまった。 | 1-2-3-4 |
| 14. この学習によって、自分の苦手なところに気づいた。 | 1-2-3-4 |
| 15. 学習の最後まで、意欲的に取り組んだ。 | 1-2-3-4 |
| 16. 途中で、別のほうにしておけばよかったと後かいた。 | 1-2-3-4 |
| 17. OHP やビデオなどを、よく学習に利用した。 | 1-2-3-4 |
| 18. いつも、学習がうまく進んでいるかどうか、確認した。 | 1-2-3-4 |
| 19. 友達と自分とで、学習の方法が違うことに気づいた。 | 1-2-3-4 |
| 20. この学習によって、自分のよいところをのばすことができた。 | 1-2-3-4 |

年 _____ 組 _____ 番号 _____ 名前 _____ (男・女)

- | | | |
|---------------------------------------|---------|---|
| | は | い |
| | い | え |
| 21. 自分の選んだ学習は、自分にとって適切だったと思う。 | 1-2-3-4 | |
| 22. 校外の図書館や施設にも、積極的に出かけて行った。 | 1-2-3-4 | |
| 23. この学習をしている時は、充実していて楽しかった。 | 1-2-3-4 | |
| 24. この学習を始めてから、テレビや新聞をていねいに見るように心がけた。 | 1-2-3-4 | |
| 25. この学習によって、自分の得意なことがわかった。 | 1-2-3-4 | |
| 26. 納得のいくまで、よく考えて選択した。 | 1-2-3-4 | |
| 27. この学習の時間は、とても短く感じられた。 | 1-2-3-4 | |
| 28. 毎時間、学習の結果をきちんとノートにまとめていた。 | 1-2-3-4 | |
| 29. ふだん気づかなかった意外なものでも、自分の学習の参考にした。 | 1-2-3-4 | |
| 30. やりがいがありそうなので、選択した。 | 1-2-3-4 | |
| 31. 友達が、自分とは違った興味や関心を持っているのがわかった。 | 1-2-3-4 | |
| 32. 学習の手引書は、あまり利用しなかった。 | 1-2-3-4 | |
| 33. 発表会や鑑賞会を通して、友達のやったことも理解しようとした。 | 1-2-3-4 | |
| 34. 自分の長所が伸ばせるかどうか、考えて選択した。 | 1-2-3-4 | |
| 35. その時間の後、次の時間の目標や活動を考えた。 | 1-2-3-4 | |
| 36. 先生や友達に、教えてもらった方法や資料を使ってみた。 | 1-2-3-4 | |
| 37. 自分がどういうことに興味があるのか、わかった。 | 1-2-3-4 | |
| 38. わからないことがあれば、友達同士で助けあった。 | 1-2-3-4 | |
| 39. 自分のやっている学習について、友達に意見を言ってもらった。 | 1-2-3-4 | |

- | | |
|--------------------------------------|---------|
| 40. この学習を通して、選択学習のやりかたが身についたと思う。 | 1-2-3-4 |
| 41. この学習を通して、友達の長所や短所を見つけられた。 | 1-2-3-4 |
| 42. 今までの教科書での学習を、この学習に生かした。 | 1-2-3-4 |
| 43. 別に理由もなく、ただ何となく選んだ。 | 1-2-3-4 |
| 44. その時間の学習で、よくできたことやうまくできたことを考えてみた。 | 1-2-3-4 |
| 45. この学習のように自分の力で学習するのは、おもしろいと思う。 | 1-2-3-4 |